意味生成としての「スポーツ運動」体験の時間性

久保 正秋

Masaaki Kubo: The temporality of the experience of sports movements as “semantic generation”. Japan J. Phys. Educ. Hlth. Sport Sci. 58: 243-256, June, 2013

Abstract : This study examines the temporality of the experience of sports movements. First, it makes a quantitative comparison of sports based on Nakai’s argument, and discusses how qualitative objects of sports movements are transformed into quantitative objects through quantitative comparison. Second, this study considers the objective and quantitative time in sports and argues the relationship between the means and the end. Finally, this study discusses the subjective and qualitative recognition of time in sports and the experience of sports movements as “semantic generation.”

The results of this examination were as follows:

- 1) Sports are indicated as quantitative concepts such as scores and records. These quantitative aspects of sports are compared quantitatively according to the elements of competition in sports. Sports movements are also measured and analyzed quantitatively based on quantitative comparisons. Even qualitative aspects of sports movements such as kinesthesises of players can be transformed into quantitative data.
- 2) The tendency for quantitative transformation reflects the recognition of time in sports. Both objective and quantitative time are important. Time proceed continuously in a straight line from the present to the future. The present time becomes the means to an end (the future). Similarly, sports movements become a means to an end. The results of sports movements (i.e. the future) such as scores, records and winning, or health and socialization, are more important than practice of sports movements (the present).
- 3) Differences in time recognition exist in sports. The subjective and qualitative recognition of time is called vertical time. For vertical time, the moment of practicing sport (the present) is essential and is not a means to an end (the future). In the moment of sports movements, physical experience as “semantic generation” arises.

This study concludes that the physical experience as “semantic generation” in the moment of sports movements (the present) is the essence of sports. However, this qualitative experience of sports movements is likely to be a means to an end (the future). Because qualitative aspects of sports movements are transformed into quantitative aspects, they are at all times dependent on the element of competition in sports.

Key words : sports movement, semantic generation, temporality

キーワード : スポーツ運動, 意味生成, 時間性

序

平成23年6月に「スポーツ基本法」が公布された。これは昭和36年に制定された「スポーツ振興法」の50年ぶりの改正である。今回の改正

で新たに加わった前文においてスポーツは、「世界共通の人類の文化」であり、「心身の健全な発達, 健康及び体力の保持増進, 精神的な充足感の獲得, 自律心その他の精神の涵養等のために個人又は集団で行われる運動競技その他の身体活動」とであると定義されている。そして「スポーツを通

東海大学体育学部

〒259-1292 神奈川県平塚市北金目4-1-1

連絡先 久保正秋

School of Physical Education, Tokai University

4-1-1 Kitakaname, Hiratuka-shi, Kanagawa 259-1292

Corresponding author kubo@keyaki.cc.u-tokai.ac.jp

じて幸福で豊かな生活を営むことは、全ての人々の権利であり、全ての国民がその自発性の下に、各々の関心、適性等に応じて、安全かつ公正な環境の下で日常的にスポーツに親しみ、スポーツを楽しむ、又はスポーツを支える活動に参画することのできる機会が確保されなければならない」と謳われている。このようにこの法令は、スポーツを国民の権利であると認め、国がそれを保証しようとするものである。しかしながらスポーツは、「スポーツ基本法」の前文にあるように「心身の健全な発達、健康及び体力の保持増進、精神的な充足感の獲得、自律心その他の精神の涵養等のため」に行われるのであろうか。我々はどうして「スポーツを行う」のであろうか。そしてそこにはどのような意義があるのであろうか。

佐藤が述べるように『「スポーツ＝身体運動」という等式に妥当性は認められない』（佐藤，1998）のであり、「スポーツを行う」ということは、例えば「バスケットボールを行う」とは、パス、ドリブル、シュートなどという形態の身体運動を行うことである。そしてこのような身体運動によってスポーツが構成されているのである。「スポーツを行う」ということが、これらの「身体運動を行う」ことであれば、その身体運動の実践レベルにおいてスポーツの意義を問う必要がある。このようなスポーツにおける身体運動は、「スポーツ運動 (sports movements, sporting movements)」(Lenk, 1979) と呼ばれるものであり、その「スポーツ運動」の体験には、「社会の中における体験と社会を超えた世界への体験」という二面性がある (久保, 2009b, p. 193)。その前者が先の「スポーツ基本法」の前文に謳われているような「発達」「増進」「獲得」「涵養」へと結びついていくような体験であり、そこに「スポーツ運動」の社会的意義を認めることができる (「社会化」への体験)。それに対して後者は、「鉄棒でクルッと回り始める瞬間、テニスのストロークで心地よいボールの弾みをラケットに感じる瞬間、バスケットボールのシュートでボールが指先を離れていく瞬間」であり、言葉で表現できない「スポーツ運動」の瞬間の体験である。そしてそ

れは「社会システム」を超えた世界へと繋がり、意味を生成するという意義が認められる (「超社会化」への体験：意味生成の体験) (久保, 2009b, pp. 186-187)。

このように「スポーツ運動」の体験には、「社会化」への体験と「超社会化」への体験という二面性があるにもかかわらず、「スポーツ運動」の実践において、多くはこの「社会化」への体験に意義を認め、その瞬間の体験は後ろに追いやられてしまう。一般的に我々は「スポーツを行う」とき、すなわち「スポーツ運動」を行う、その時に「健康の増進」や「精神の涵養」などを意図していない。その「スポーツ運動」の結果として健康や体力が増進し、ある種の社会的に好ましい精神が涵養されるのである。しかしながら、どうして「スポーツを行う」のかと問われた場合、多くは「健康のため」「自己研鑽のため」などと答え、あの言葉にならない「スポーツ運動」の瞬間の体験を語ろうとはしないのである。何故に、このような「スポーツ運動」の意味生成の体験が、健康や社会化のための手段となり、社会的フレームワークの中の有用な経験へと変容してしまうのだろうか。

このような身体運動における意味生成と体験に関する先行研究として、久保 (久保, 2006, 2009a, 2009b)、深澤・石垣、(深澤・石垣, 2010)、高橋 (高橋, 2011) らの研究がある^{注1)}。これら体育哲学の領域における意味生成論の展開のきっかけとなったのは、1999年に開催された日本体育学会体育原理専門分科会シンポジウムにおける矢野智司の発表、及び体育原理研究29号に掲載された論文「非知の体験としての身体運動」(矢野, 1999) である。そのなかで矢野は、身体運動における意味生成の体験の重要性を論じるとともに、手段－目的関係に組み替えられることによって身体運動が手段化していくことを批判している。しかしながら矢野の論議の対象は、教育という関係性における身体運動の手段化であり、スポーツの実践それ自体において生起する手段化ではない。また矢野は、これらの手段化に関して「未来に目的を設定し、未来のために現在を従属

させる（矢野，1999, p. 109）」と批判しているが、それを教育における「発達の論理」と「有用性の原理」に基づくとするに止まっている^{注2)}。

そこで本研究では、身体教育という関係性から離れ、スポーツの実践それ自体において生起する「スポーツ運動」の手段化を論議の対象とする。そして本研究は、矢野の指摘するような手段化、すなわち「スポーツ運動」の瞬間の体験（現在）が健康や社会化（未来）のための手段へと変容してしまう事態が、スポーツにおける客観的、量的時間認識と深く関連するものであり、またそのような時間認識がスポーツの量的比較という要素に起因していることを明らかにすることを目的とする。

そのためにまず、スポーツにおいて質的なものが量的なものへと変換されていく現状を分析する。次にこの量的なものへ向かう傾向とスポーツにおける客観的、量的時間認識との関連を検討し、「スポーツ運動」が手段化していく様相を論じる。そして最終的に本研究は、従来とは異なる時間認識における「意味生成」としての「スポーツ運動」体験を論じる。

1. 「スポーツ」における量的なものと質的なもの

1) 「スポーツ」における量的比較

スポーツ（競技スポーツ）は量的なもので表される事が多い。例えば球技では、シュートによって生じたボールのゴール通過の回数によって得点化される。そして定められた時間や攻撃回数の後、65対64のようにそのスポーツの試合は数量化され、表示される。あるいは陸上競技では、人間やその使用する用具の移動の結果としての速さ、高さ、距離などによって表される。そして0.1秒でも速く、0.1 cm でも高く、あるいは長く移動することを競い合う。さらに体操競技やフィギアスケートでは、そのひとつひとつの演技がポイントとして集計され、最終的な得点として表記される。美的な要素でさえも芸術点として数量化されポイントに加算される。このようにスポーツは量

的なもので表され、そして比較される。新聞のスポーツ欄を見ても、記載されている記事の多くは、結果としての量的なものの比較である。

このような量的な比較はスポーツの「競争性」に起因する。中井はスポーツの解釈におけるふたつの要素として「競争性」と「筋肉操作」をあげ、その「競争性」について次のように述べている。「競争性の意味は本質的に量的比較でなければならない。従ってそれは同質的でなければならない。換言すれば、二個以上の異質の実体とその共通なる属性の領域内で、すなわち同質的属性の上にその量的比較を行うことを指す（中井，1981a, p. 410）」中井が指摘するようにスポーツの要素のひとつは「競争性」であり、その競争は量的比較において行われる。よって「そこに異質的なものの量的転換が行われること、あたかも現象の数量化においてなされるところのごときものがそこに在る（中井，1981a, p. 410）」ということになる。

スポーツ（競技スポーツ）は互いに「勝とうと試みる（Fraleigh, 1984）」ところに成立するものであり、「勝とうと試み」ないことにはスポーツの試合は成立しない。そしてこの「試み」の競争は、量的比較において行われるのであり、ここでは質的なものはあまり問われない。このスポーツを構成するところの「スポーツ運動」もまた、量的なもので計測され、表記される。例えば「スポーツ運動」の変化を、横軸に時間を、縦軸にその量的変化をおく「練習曲線」というもので表すことがある。「砲丸投げ」というスポーツにおいて、その砲丸を押し出すという「スポーツ運動」の変化は、ある一定期間の後に、その砲丸の到達距離が15 m から16 m へ増加したというグラフによって表される。このように「スポーツ運動」の変化は、その結果を量的なもので計測され、確認される。あるいは、スポーツバイオメカニクスにおいて「スポーツ運動」の分析は、ランニングを例とすれば、次のような手法で研究される。まず、走者のフォームを高速度カメラで撮影し（kinematics 的手法）、それに基づいてその身体

節の角度、角速度などを計算する。さらに足に作用する地面反力の計測（force platform 法）、筋の活動状況の計測（筋電図的手法）、あるいは間接に作用する力や関節まわりのモーメントなどの内力の推定（kinetics 的手法）などが行われる（阿江，2008）。これらは「スポーツ運動」における身体（分析点）の動きの結果を数量化し、その量的な変化を客観的に捉えようとするものである。

2) 「スポーツ運動」における質的なもの

スポーツの「競争性」は量的比較を目指すものであり、それによって「スポーツ運動」は量的変換が行われ、数量化され比較されるものであった。しかしながら「スポーツ運動」は全て量的なものとして捉えられるものであろうか。ここでは「スポーツ運動」における質的なものについて考えてみる。

先に述べたように中井は、スポーツの解釈におけるもうひとつの要素として「筋肉操作」をあげ、「筋肉が、筋肉自らの行為をその内面の神経をもって評価し、そこに深い快適性をもって端的なる反省を為すこと、ここに『自然の技巧』への真に純粹なる直感があるというべきであろう」と述べている。この「自然の技巧」とはカントの概念（カント，1964）であり、中井はそれを「主観の認識すべき現象自身の中にすでに理性的合法則性が内在することを意味」するものとしている。そしてこの「自然」を、内なる自然である「人間の身体機関構成」まで広げ、「自然の技巧」が「内なる自然の技巧」を通ることによって美の現象が生ずるとし、そこに「筋肉操作」の美感をみるのである。さらに中井は、「主観も筋肉であり、客観も筋肉である。自分自らの中にその合理性を直感をもって把握するのである」と述べる（中井，1981a, pp. 413-416）。

この「主観も筋肉であり、客観も筋肉である」という中井の言葉を樋口は次のように説明する。樋口は「スポーツ運動を実践するのは身体によってである」とし、その身体は「主観一身体」と「客観一身体」という二重的な性格をもつとする。

「主観一身体」とは運動感覚的知覚の担い手であり、意志や判断を持続させる身体であり、「客観一身体」とは物理的生物的構造によって制限された「客体的な存在」であり、またトレーニングや学習によって能力が向上し、技術が記憶されるといふ身体である（樋口，1987, pp. 147-150）。そして樋口は、「客観一身体の内なる自然の技巧がスポーツ技術を介して自然界の外なる自然の技巧に浸透するとき、実践者は主観一身体にもたらされる運動感覚的知覚を美的気分として把捉する（樋口，1987, p. 153）」と述べるのである。さらに樋口は別の論考で次のように述べている。「スポーツをプレイする際、実践者は自らの身体的感覚を感じている。いわば身体が身体を感じるのだ。そこでは身体の二重性、両義性が生起している。そのような状況を分節化してみると、実践者は『主観一身体』と『客観一身体』とを持っていると考えることができるであろう（樋口，1994, p. 191）」。そして、日常生活とは異なるスポーツ実践によって、この身体の二重性が生起し、その実践者は「身体の両義的な分裂を体験」し、「主観一身体と客観一身体の間に運動感覚的な体験が生じる」という（樋口，1994, p. 191）^{注3)}。

「スポーツ運動」はバイオメカニクス的研究においてもまた、「動きそのものは外から見れば、客観的（力学的）存在であるが、選手の中では主観的（心理的）存在でもある（阿江，2008）」と述べられるように、客観的分析の対象であると同時に、主観的なものでもある。樋口のいうことの「客観一身体」の動きや変化は量的な移動や変化として捉え、客観的に分析することが可能となる。しかしながら、「スポーツ運動」実践者の「客観一身体」と「主観一身体」との間に生じる「運動感覚的な体験」は量的に分析することができない質的なものなのである。

3) 質的なものの量的なものへの変換

「スポーツ運動」の実践において「客観一身体」と「主観一身体」との間に生じる体験は質的なものであるにもかかわらず、量的なものとして捉えられることがある。先に例としてあげた「砲丸投

げ」というスポーツにおける15 m から16 m への飛距離の増加は、「スポーツ運動」の結果の量的変化として分析可能であり、その投げる（押し出す）という「スポーツ運動」もまた客観的な法則性に支配された「客観一身体」の動きの変化として量的に分析することが可能である。そして「客観一身体」と「主観一身体」との間に生じる体験においても、1 m の飛距離の増加は、砲丸を押し出す「力」の感覚が増大したものであり、それは量的な変化であると解釈することができ、それが一般的である。しかしながら、この砲丸を押し出す「力」の感覚の変化は量的なものであろうか。

ベルクソンは心理的状況の強さが量的に捉えられることを批判し、そのひとつの例として「筋肉努力」を取り上げている。ベルクソンによれば、例えば「拳をだんだん強く握りしめる」際の努力の感覚は手の中に局在し、増加する大きさを通りすぎていくように思われるが、「実際には、手を感じているのは同じもの」であり、最初は手の中に局在化していた感覚が腕へ、肩へと伝わり、そしてもう一方の腕が硬直し、両足が硬くなり、呼吸が停止するのである（ベルクソン、2001, p. 31）。つまりこの動作の変化は、拳を握りしめる感覚が量的に増加したのではなく、「身体全体が関与」する動作へと質的に変化したのである。このように考えると、「砲丸投げ」の1 m の飛距離の増加において「スポーツ運動」の実践者が感じているのは、「身体全体が関与」する動作への質的变化であり、ベルクソンが言うように「この感覚の増大はむしろ増大の感覚と呼ばれるべき（ベルクソン、2001, p. 63）」ものと捉えることもできる。しかしながら、このような「客観一身体」と「主観一身体」との間に生じる質的变化の体験は、一般的に客観的量的な変化として認識され、質的なものは忘れ去られてしまう。

他の例としてテニスのサーブという「スポーツ運動」を考えてみよう。テニスのサーブによるボールのスピードは機器によって測定され、時速90 km から100 km に増加したという量的変化で表される。そしてそれはサーブという「スポーツ運動」のスウィングスピードが増加したことによ

ると解される。つまりこの計測された「スポーツ運動」の結果に基づいて「スポーツ運動」自体が量的に変化したのだという解釈である。しかしながらこの「スポーツ運動」の実践者にとってみれば、トスの高さや位置、足の位置、スウィングのタイミング等々が様々に変化し、統合することによって生じたサーブという「スポーツ運動」の質的な変化であるともいえる。スウィングスピードの増加という量的な変化を狙ってサーブを試みた場合、その試みは失敗に終わる事が多い。このようなことはテニスのストロークや野球のピッチングなど、「スポーツ運動」のスピードの増加を試みる状況において同様に言えることである。

あるいは、正確さを求められる「スポーツ運動」においてもこのような傾向を見ることができる。バスケットボールの「シュート」という「スポーツ運動」、例えばフリースローという状況において初心者は、ボールをリングに向けてまっすぐに「投げ」てしまうことが多い。当然、投射角度が低くなり、ボールは十分な放物線を描くことができず、ボールはリングの中に入ることはない。そしてアドバイスを受け、練習を積むことによって投射角度が高くなり、ボールはリングの中に入るようになり「シュート」という「スポーツ運動」はその正確さを増すようになる。この変化は一般的に、投射角度の増加という量的な変化として捉えられる。しかしながらこの変化は質的なものとして捉えることもできる。投射角度の増加という結果をもたらしたのは、当初、肘関節を中心として前腕を前方に移動する（肘を伸ばす）運動であったものが、肩関節を中心として上腕を上方に移動する（脇を広げる）運動に変化したことによる。つまり、ボールを「投げ」ていたことがボールを「押し出す」ことに変化したのである。その実践者が感じているのは「シュート」という「スポーツ運動」の「投げ」から「押し出し」への質的变化である。

さらに、「スポーツ運動」の実践者の感情や気分でさえも量的なものとして捉えられることがある。スポーツ心理学ではPOMなどの測定尺度を用いて人間の感情や気分を測定、数量化するとい

う科学的方法が採用されている。そこでは人間の感情という質的なものが量的なものへと変換され、「快感情が増加した」「快気分を大きく向上」などと記述される。科学的技法を用い客観的に「スポーツ運動」を分析することを否定するものではないが、ここにも質的であるものを量的なものに変換するという傾向が認められる。

このように我々は、「スポーツ運動」の質的なものを量的なものとして考える傾向がある。ベルクソンは、我々が主観的状況よりも外的事物を重要と考えるが故に、そこに外的原因の表象をもち込んで客観化しようとするとし、「内包的なものの背後に外延的なものを、質の背後に量を認めるようになり（中略）前者の中に後者を置き入れ、感覚を大きさとして取り扱いがちになる（ベルクソン、2001, p. 87）」と述べている。このような、「スポーツ運動」における質的なものを量的なものへと変換し、客観性を得ようとする傾向は、スポーツにおける時間を量的、客観的なものとして捉える時間認識に関連していく。

2. 「スポーツ」における時間の空間化

1) スポーツにおける「時間的リアリズム」の支配

アイヒベルグは、近代において「祝祭的なものの繰り返しという時間のパターンは新しいタイプの時間秩序に取って代わった（アイヒベルグ、1997, p. 162）」と述べている。そしてスポーツにとって新しいタイプの継続性、すなわち「未来」へ向かうことが取り入れられ、より速く、より高く、より強くという方向性に基づいて記録の向上、業績の増加が目指され、それゆえにスポーツにとって重要なものは「結果の生産」となり、その結果を客観的にするための標準化、あるいは数量化、測定、記録が主たるものとなり、「ムーブメントと活動」は副次的なものとなったという（アイヒベルグ、1997, pp. 162-164）。この近代のスポーツを支える時間秩序は、継続性であり、未来に向けて直線的に進む時間なのである。

このような時間認識は近代における「時間的リ

アリズム」に基づいている。佐藤によれば「時間的リアリズム」とは「時間を心や意識、あるいは主観性といったものに依存しないものとみなす立場一般のこと（佐藤、1999, p. 9）」であり、それは「物質の世界と精神の世界が明確に分離されること」と、「物質の世界における自然法則と時間とが不可分なものとされること」の二つの要件が同時に満たされることによって成立する（佐藤、1999, p. 18）とされる。そしてこの近代における「時間的リアリズム」は「ニュートンの絶対時間の概念として結実（佐藤、1999, p. 31）」するのである。このような時間認識は、我々にとって一般的なものであり、時間は人間の心や意識とは関係なしに、過去から未来へと均一に直線的に流れていくものであるという認識である。

この「時間的リアリズム」は、スポーツにおいても浸透している。例えばスポーツのゲームは制限された時間の中で行われる事が多い。ゲームの時間としての90分や40分、あるいはゲーム中の制限としての24秒、3秒など、これらの時間は客観的な時間でなければならない。あるいは陸上競技や水泳競技では、その結果が絶対的時間によって測定され、記録として残される。その時間は人間の意識や主観性に左右されるものであってはならない。先に述べた「スポーツ運動」のバイオメカニクスの分析やスポーツ心理学的分析もこのような時間認識をその基礎としている。「スポーツ運動」の実践もまた同様である。例えば練習において「スポーツ運動」を実践するとき、「いま」よりも「明日」「来月」「来年」の方がその「スポーツ運動」が洗練されていることを想定している。つまり「未来」における「結果の生産」を念頭に置いて、そこに向けて一本の直線を引くように「いま」を設定している。当たり前のようなことであるが、このような考えを支えているのは「いま」から「未来」へと直線的に、客観的に連続して続く時間の認識なのである。

2) スポーツにおける時間の空間化

「時間的リアリズム」を支えるニュートン的な絶対時間に対してカントは、時間を「感性的直観

の純粹形式である（カント，1979）」と述べ、時間は主観との関わりにおいて考えられるものとした。つまり量的な時間認識に対する質的な時間認識の主張である。ベルクソンは、カントが主張するように時間が客観的、量的なものではなく主観的、質的ものであることを認める。しかしながらベルクソンは、カントが「時間を等質的な環境とみなしたこと（ベルクソン，2001，p. 276）」を誤謬であるとして批判する。ベルクソンによれば、我々は「次元の異なる二つの現実」を認識するという（ベルクソン，2001，p. 119）。一方は「異質的」で「感覚的質」という現実であり、他方は「等質的」な現実、すなわち「空間」であり、後者は「人間の知性によってはっきりと理解されるもの（ベルクソン，2001，p. 119）」である。そして「時間を、空間とは異なるが、空間と同じく等質的な無規定な環境とみなす（ベルクソン，2001，p. 119）」ことによって時間は「そのとき知らぬ間に空間に逆戻り（ベルクソン，2001，p. 120）」してしまうというのである。掛下はこのベルクソンの時間論について次のように説明している。「ベルクソンの出発点是非空間的なものを空間内に並置させること、非延長的なものを延長に、質を量に不当に解釈すること、持続と延長、継起と同時性、質と量を混同し、純粹に内的な諸状態の間に量的な差を設けることを避けて、時間の真の本質に迫ろうとすることであった。これは、そもそも生きた流動的な『生』のあらわれとしての時間が、等質的、量的、概念的な扱いを受けることによって、結局は空間化に陥って、その本来の生命を失ってしまうことへの抵抗であった」（掛下，1971，p. 111）^{注4）}。

一般的に我々は、刻まれたひとつひとつの時を積算して量として捉え、その経過（前・後の区別）によって連続線で結び、ひとつの流れとして考えることが多い。例えば先に述べた練習曲線のように、横軸に時間的経過（積算された「等質的」な時間）をおき、縦軸に「スポーツ運動」の量的変化において、その縦軸と横軸で構成された二次元的平面（空間）において「スポーツ運動」の変化をみようとする。よって「砲丸投げ」という「ス

ポーツ運動」の変化を、その時間軸において飛距離の増加という量的な変化で捉えようとするのである。また「スポーツ運動」の実践そのものも、「等質的」な時間の経過によって捉えられる。例えばテニスのストロークという「スポーツ運動」において、我々はそれを「テイクバック」―「インパクト」―「フォロースルー」という区別した動きとして認識する。そして「テイクバック」の後、「インパクト」、そして「フォロースルー」というそれぞれ区別された動きが時間的に前後の順を追って連結しているとみるのである。よって「テイクバック」から「インパクト」までの量的時間やスピード（量的時間に対するラケットの移動量）、あるいは「インパクト」後のボールのスピードを測定したりする。これも同様に、縦軸と横軸で構成された二次元的平面（空間）において「スポーツ運動」を捉えようとするものである。このような事態をベルクソンは、「わたしたちが時間を空間の中に投影し、持続を拡がりと表すために、継起（時間的に前後の順を追って現れること：引用者）の方も私たちにあって、その諸部分が相互浸透することなしに接し合っているようなひとつの連続線ないし連鎖という形態をとる（ベルクソン，2001，p. 123）」と説明している。

しかしながら、「スポーツ運動」の実践者においては、一般的時間認識とは異なる時間認識が存在することがある。例えばテニスのストロークという「スポーツ運動」は主観的な時間認識において、「テイクバック」―「インパクト」―「フォロースルー」という動きが時間的経過に従って順に生起しているとは限らない。強烈なサーブに対しては「インパクト」しか意識されないし、「フォロースルー」を意識して行うことによって「インパクト」時のラケットスピードは増加することもある。これはベルクソンの言うところの「異質的」で「感覚的質」という現実の認識であり、先の「等質的」な時間の認識とは異なる。あるいは、「フロー体験」（ジャクソン・チクセントミハイ，2005）や「至高体験」（マズロー，1987）と呼ばれるような体験における時間認識がある。その時、「スポーツ運動」の実践者には、ボールが止

まって見えたり、相手選手の動きがスローモーションのように見えたりするという。このようなパフォーマンスが究極的に向上した体験ならずとも、無我夢中で「スポーツ運動」を実践し、あっという間に試合が終了してしまったりすることは誰もが体験するであろう。このように「スポーツ運動」の実践者における時間は、一般的な客観的、分析的時間とは異なることがあるといえる。しかし我々は、このような時間を認めようとなしな。それらはアドレナリンの放出や異常な集中力の結果であると理解し、時間の流れは変わらないと判断する。これは「等質的」な現実が「人間の知性によってはっきりと理解されるもの（ベルクソン、2001, p. 119）」であり、またその「等質的」で量的、連続的な時間性が近代スポーツの特徴であり、そして「時間的リアリズム」に支配されているからである。

3) 「スポーツ運動」の手段化

このような空間化された量的、連続的、直線的な時間は、その半直線の端点である「いま（現在）」を未来に従属させる。すなわち「現在」の手段化である。未来は「いま（現在）」よりもよいもの、よくあるべきものであり、そのために「いま（現在）」があるのである。このような認識は、近代オリンピックの標語「より速く、より高く、より強く」に如実に表れている。未来の金メダルに向けて、「いま（現在）」、ハードなトレーニングを課すのである。そこにおける支配的な価値は、アイヒベルグが述べるように「結果の生産」であり、「業績」である（アイヒベルグ、1997, p. 163）^{注5)}。それはまた「スポーツ運動」自体をも手段化させることになる。試合中の「パス」「ドリブル」「シュート」などの「スポーツ運動」も、定められた時間の終着点（未来）における業績を生産するための手段となる。例えば「シュート」という「スポーツ運動」は、その実践の「いま（現在）」であるよりも、その後の結果として生じる得点（未来）が重要なのであり、そのための手段である。このような傾向は「健康スポーツ」と呼ばれるものにも見受けられる。例えば一般的なウオーキン

グでは、その「歩く」という「スポーツ運動」はそれ自体が目的であり、手段ではない。しかしながら「健康ウオーキング」となると、その目的は「健康」となり、「歩く」という「スポーツ運動」は「健康」になるための手段に変化してしまう。未来の健康のために「いま（現在）」、歩くことが求められるのである。

このように「スポーツ運動」は、矢野が指摘するように、その「運動によってもたらされる身体文化の習得や運動能力あるいは体力の向上」に意義があるものとされ、手段—目的関係に組み替えられていく（矢野、1999）。「スポーツ運動」はそれ自体が目的であるよりも、結果として生じる「記録」「勝利」、あるいは「健康」のためのものと化す。そして「スポーツ運動」は、その結果として生じる量的なものの増産へと向かう。「スポーツ運動」の「いま（現在）」には意味はなく、また「スポーツ運動」それ自体の質的な変化であるよりも、結果としての量的変化が最大の関心事となる。「いま（現在）」、実践されている「スポーツ運動」は、未来のための手段となる。

序論で述べたように、「スポーツ運動」の実践において我々は、言葉で表現できない瞬間を体験する。鉄棒でクルッと回った瞬間、テニスのストロークでボールを打った瞬間、バスケットボールのシュートでボールが指先から離れるその瞬間の体験である。これは樋口の言うように「主観—身体」と「客観—身体」の間に生じる運動感覚的な体験であり、質的、主観的体験である。しかしながら、「時間的リアリズム」に支配されている我々は、その「瞬間」を質的に認識することなく、連続した等質的な時間の中に配置して客観的に認識する。「時は流れる」のであり、その「瞬間」は一直線に引かれた時間における点に過ぎない。その直線は未来へと続き、「瞬間」という点は未来のためのものとなる。「スポーツ運動」の「瞬間」は、未来の得点や記録、勝利、あるいは健康という結果を生産するための手段となる。そして意味生成の「瞬間」は忘れ去られて行く。このように、未来へと向かう客観的、量的、直線的な時間認識は、「いま」「ここ」において生起している

「スポーツ運動」の「瞬間」を未来へと従属させる。そして、「スポーツ運動」の実践とその瞬間の体験（現在）が社会化（未来）のための手段へと変容してしまうことになる。

本研究は次に、これら客観的、量的時間とは異なる、主観的、質的な時間を取り上げ、「スポーツ運動」体験の従来とは異なる時間性を論じることを試みる。

3. 「スポーツ運動」における異なる時間性

1) 「いま」「ここ」の「瞬間」/垂直的時間

ベルクソンは、このような分割し、計量することの可能な等質的な環境としての直線的な「時間」を否定する。そして、メロディーの継起的な楽音を例にあげ、それを「互いに溶け合い、浸透し合い、明確な輪郭もなく、相互に外在化していく何の傾向性もなく、数とは何の類似性もないような質的諸変化の継起以外のものではありえないだろう（ベルクソン、2001, p. 126）」とし、「純粹持続」という概念を提示する。しかしながらその「純粹持続」は、それが持続であるが故に批判されることになる。

掛下は、ベルクソンが「時間の本質が瞬間であること、それは客体として計測することは不可能で、量的限定とは完全に別個な純粹に質的なもの」であることを認めていたと述べる（掛下、1969, p. 4）。しかしながら「純粹持続」が、「相互浸透」としての一種の「ひろがり」として表現されているが故に、それは「流れる時間」となり時間の空間化が不可避となってしまう点を指摘する（掛下、1969, p. 5）。そしてベルクソンが「時間の本質を瞬間に見ながらも、断絶の瞬間において主体的に『はたらく』者の立場よりは、むしろ持続として流れる時間の中に生命を『観る』者の立場を選んだことで、結局は時間を客体化、空間化へ追いやってしまった（掛下、1971, p. 119）」ことを批判する。

このベルクソンの「純粹持続」に対してバシュラルは「持続は持続しないいくつかの瞬間によ

ってつくられている（バシュラル、1969, p. 21）」と述べ批判する。バシュラルは「生とは水路（客観的時間の軸上：引用者）を傾斜に沿って流れるもの」ではなく、生が現実を見出すのは「常にひとつの瞬間においてである」（バシュラル、1969, p. 24）とし、人間存在を、「空間にも時間にも同時によりかかっているひとつの総合」として、「場所と現在、つまり『ここに』と『いま』との結合点」に「ある」ものとして捉える（バシュラル、1969, p. 35）。そして「現実として存在するのはただひとつ、瞬間だけである。持続も、習慣も、進歩も、瞬間の分類」にすぎないと主張するのである（バシュラル、1969, p. 109）。

この「瞬間」という時間性は、掛下に従えば「量的、空間的に規定された永遠の連続性としての時間ではなく、質的、断続的に体験された『いま』としての時間」（掛下、1969, p. 5）といえる。つまり、量的、客観的、直線的な時間とは異なる質的な時間認識がここに認められる。そしてこの時間の瞬間性は「垂直的時間」と表現される。バシュラルは「瞬間」を「ポエジー」として捉え、「ポエジーとは瞬間化された形而上学である（バシュラル、1969, p. 125）」と述べる。そして、その中に「停止した時間、尺度にはしたがわない時間、つまり、川の水や過ぎゆく風とともに水平的に逃げ去ってしまう普通一般の時間と区別するため、特に『垂直的』と呼んでみたい時間の要素を見出すことができる（バシュラル、1969, p. 126）」と述べている。そしてこの「垂直的時間」において、「自分に固有な時間」を「他の時間」「事物の時間」「生の時間」に帰属させないことに慣れることによって「水平的な時間」の中にしばられている存在を解放することになると主張する（バシュラル、1969, pp. 128-129）。掛下は、時間論には伝統的な「合理的時間論」と「瞬間の時間論」のふたつがあり、前者は「正確な数、量を計測しながら、過去、現在、未来へと、規則正しく『水平』に推移するものが時間であると解する」ものであり、後者は「あらゆる量的空間的推移に優先して、直観によって飛躍的に、いわば

『垂直』に、いっきょに事態の核心に参入するその瞬間に時間の本質を見ようとする」と述べている（掛下，1975）。

このような「垂直的時間」という時間性は、異なる研究領域でも主張されている。例えば、教育における意味生成の体験の重要性を主張する矢野は、労働をモデルとした「発達の論理」に従って教育を「水平（社会）の軸という一次元的な次元」でとらえ「教育とは共同体において未熟な成員を一人前の成員にまで育てる」とすることを批判し、教育をとらえる新たな視点として「体験の次元すなわち垂直（生成）の次元」を設定することを提唱し、そこに新たな生成の可能性があることを指摘している（矢野，2002）。あるいは余暇の本質を探ろうとするヨゼフ・ピーパーも、『余暇（Musse：引用者）』は、労働の日の時間的経過を水平の線にたとえるなら、それと垂直に交わる線のようなもの（ピーパー，1988, p. 73）」と述べ、真実の「余暇」によって「閉ざされた世界」をあとにして「自由な世界へといたる門」が開かれるとしている（ピーパー，1988, p. 75）^{注6)}。これらの指摘は、我々にとって一般的な従来の時間、すなわち未来へと向かう客観的、量的、直線的な、伝統的な合理的時間とは異なる、主観的、質的、垂直的な時間認識が存在することを意味し、そしてそのような時間によって人間が新たな世界へといたることの可能性を示唆している。ではこのような従来とは異なる時間性、すなわち「垂直的時間」はスポーツにおいて、どのようなものとして出現するのであろうか。

2) 「スポーツ運動」における「垂直的時間」

「スポーツ」においても、時間の本質を「瞬間」に見る研究者がいる。例えば中井は、スポーツマンが練習によって特殊な「冴え」をもたらす気分を「成長するモルフェの瞬間的な把握であり、時そのものの実存的深化である」と表現し、そこにあるものは「形而上学的時間」であり、「流れない時がそこに只拡がって行く」と述べている（中井，1962, pp. 181-182）。そして「スポーツマンの実存」はこのような「不断の瞬間の持続」であ

る（中井，1962, p. 183）としている。樋口は、この中井のスポーツ気分の時間的性格を論じるに、まず「スポーツ実践者によって体験される時間が、客観的に確定される時間とは異なる内的な時間意識にもとづいている（樋口，1987, p. 154）」ことを指摘する。そして「スポーツ実践者がスポーツ実践のなかで美的気分へと到達できるのは、まさに一瞬のできごとである（樋口，1987, p. 158）」とし、スポーツ実践者の美的気分の瞬間性を指摘している。樋口のいうところの「瞬間」はもちろん、客観的、量的、直線的な時間構造において切り取られた「いま（現在）」というものではなく、中井のいう「流れない時」、質的な時間における「いま（現在）」である。

先に述べたように「スポーツ運動」の実践は一般的に、「等質的」な時間の経過によって捉えられ、例えばテニスのストロークにおいて、「テイクバック」―「インパクト」―「フォロースルー」という区別した動きが時間的に前後の順を追って連結していると認識する。このように「スポーツ運動」は量的なものとして捉えられ、そして量的、連続的、直線的な時間において分析される。しかしながら中井は、「テニスでは一打であり、ボートでは一漕ぎである」と述べ、「かくて、ここではリズムの原始構造である呼吸、歩行、脈搏などのものが単なる拍子としての時計的時間構造をのがれて、むしろ量的なものの質化への方向をたどって、新しき解釈の領域にその形態をととのえる（中井，1981b, p. 34）」と述べるのである。「スポーツ運動」を実践する立場、バシユラルの言うように「ここ」と「いま」との結合点において存在する人間存在という立場からみれば、この「垂直的時間」という認識こそがスポーツにおける「新しき解釈の領域」を生み出すのではなかろうか。「スポーツ気分の時間的性格は、この時間的タイム、レコード及びスコアを越えて、より深く実存の内底にその根拠をもっていることに気付かなければならない（中井，1962, p. 185）」^{注7)}と中井が述べるように、その従来の認識を越えたその時間性において、「スポーツ運動」体験における意味の生成をみることができるので

ある。

4. 「スポーツ運動」の「瞬間」と意味生成

しかしながら中井は、スポーツにおけるもうひとつの時間的気分を指摘する。それは「ファンの時間気分」と中井が呼ぶものである。中井は「スポーツマン」と「ファン」との時間の構造には異なるものがあり、「ファン」は「目の前の勝負の結果のみが問題」とする。そしてこの「期待的自己忘却の現前性」がスポーツマンシップに影響を与えるという。そして現代の資本工業的文化形態において、「ファンの時間気分」が傻背的発達をすることによってスポーツマンは資本的ジャーナリズムの喰物となる傾向を深めることを指摘し、「時計的タイム及びレコードに過度の重要性をもちつつあることは、実にこの資本的文化型の人間奴隷化の一つの顕れにはかならない（中井、1962, pp. 184-185）」と主張するのである。この中井のいう「ファンの時間気分」は、先に述べた「時間的リアリズム」に支配された客観的、量的、直線的な時間構造である。つまり「試合の勝敗」という未来に生起する「結果」へと直線的に進む、空間化された連続的な時間なのであり、「いま（現在）」はその未来の手段と化している。

スポーツはその「競争性」という要素に基づいて「スポーツ運動」を量的に変換し、その比較を行う。その比較において「スポーツ運動」は、より速く、より高く、より強く、を目指して実践される。それが「筋肉操作」の美的体験を生み出すのであるが、その「量的比較」が故に、本来的には質的なものも量的なものへと変換してしまうことになる。「スポーツ運動」は直線的に進む量的な時間の中に位置づけられ、「主観—身体」と「客観—身体」の間に生じる運動感覚的な質的、主観的体験は忘れ去られ、「客観—身体」が生み出す動きの結果としての「量」が関心の中心となる。こうして「スポーツ運動」の体験は「スポーツ運動」の結果による体験へと変容していく。そこで重要なのは、中井のいうところの「時計的タ

イム及びレコード」なのである。さらに直線的時間において「スポーツ運動」を実践している「いま（現在）」は、定められた時間の終着点（未来）のためのものと位置づけられ、手段—目的関係へと組み替えられていく。そして「スポーツ運動」それ自体の実践が、社会化のための手段へと変容していくのである。

樋口は「スポーツ実践者の美的気分は、記録や勝敗という結果によって決定されるのではなく、長い練習の持続によって支えられた瞬間の内に与えられるものである。したがって意図的に生成できるものではなく、勝とうとする意志のもとでおのれの能力が十分に発揮されたとき、幸運にもたらされるスポーツ実践者の幸福の体験である（樋口、1987, p. 167）」と述べている^{注8)}。このように「スポーツ運動」の意味生成の体験は、「スポーツ運動」の結果によって決定されるものではない。「スポーツ運動」の実践、その「いま」、「ここ」の「瞬間」、「客観的に確定される時間」とは異なる内的な時間意識（樋口、1987, p. 154）において意味が生成されるのである。「自然の技巧」が「内なる自然の技巧」を通る（中井、1981a, p. 415）瞬間、「主観—身体と客観—身体の間」に生じる「運動感覚的な体験」（樋口、1994, p. 191）、その「質的、断続的に体験された『いま』としての時間」（掛下、1969, p. 5）、それが「スポーツ運動」における意味生成の瞬間なのであり、スポーツの意義であることを忘れてはならない。

本研究は平成22年度—24年度科学研究補助金（基盤研究(C)(2)）を受けて行われたものである。

注

注1) 久保は「体育における人間形成」論を批判的に論じる中で、「形成」と「生成」を区別し、身体教育における3つの次元（①身体の発達：形成—②自己の社会的体験：形成—③身体の意味ある体験：生成）を提示しているが（久保、2006、2009a）、その「自己の社会的体験」と「身体の意味ある体験」との関係に関しては何も論じてはいない。さらに久保は、「スポーツ運動」による意味生成の体験が

文化的、社会的フレームワークの中で変容してしまうことを指摘しているが（久保，2009b），その変容の仕組みに関しては触れてはいない．深澤らは、久保が踏み込んで論じなかった「拡大体験」に注目し、身体運動を介したコミュニケーションに生成という側面を見出し、そこに社会的態度の育成を進めるための基礎と位置づけられる可能性を示唆しているが（深澤・石垣，2010），身体における体験とコミュニケーションにおける体験との関連は示されていない．高橋はデュイ経験概念の再評価を試みる中で意味生成の体験に触れているが（高橋，2011），デュイの「経験」概念に基づいて身体と環境との相互作用を論じることがその中心課題であり、身体における体験を論じたものではない．このように先行研究では、身体運動、あるいは「スポーツ運動」の実践において意味生成の体験が生じることは論じられているものの、身体そのものにおける体験と社会的体験、あるいは身体における体験（コミュニケーション・相互作用）との関連については論じられていない．

注2) この「発達の論理」は労働のプロセスをモデルとするものであり、矢野は次のように説明する．「労働では、現在の欲望を否定して、未来に目的を設定し、未来のために現在を従属させる．だからこそ人間は道具を作り出すことができたのである．そのようにして、労働ではすべてを手段－目的関係に組み替えていく．したがって、労働の世界を特徴づける原理は、有用性の原理である（矢野，1999）」．

注3) この樋口の「主観－身体と客観－身体の間」に運動感覚的な体験が生じる（傍点：引用者）」という表現は難解であるが、次のように解釈することができる．樋口はこの「主観－身体」が精神と関係し、「客観－身体」が自然界と連続しているという（樋口，1994，p. 191）．「運動感覚的な体験」は「主観－身体」に生じるように思われるが、樋口は「精神」と「身体」という二元論的な図式を否定する（樋口，1994，p. 193）．つまり「身体（客観－身体）」の状況を「精神（主観－身体）」が感じるというような図式を否定するために「間に」という表記をしたものと考えられる．

注4) Bergson の日本語表記に関しては、一般的に「ベルクソン」となっているが、掛下の一連の論文、および他の文献において「ベルグソン」という表記も見受けられる．本研究では、掛下の引用文においては「ベルグソン」を用い、本文では一般的な表記「ベルクソン」を用いることとする．

注5) この「結果」「業績」は、近代スポーツが競争性を有する限り、中井が述べたように「同質的属性の上にその量的比較を行う」ことになり、それ故に客観的に、正確に計測されなければならない．結果は100分の1秒まで計測され、比較される．例えばバンクーバーオリンピックのスピードスケートでは、0.02秒差で金メダルと銀メダルを区別した．この0.02秒という時間は、人間の「スポーツ運動」にとってどのような意味があるのだろうか．

注6) ビーパーの「余暇と祝祭（Musse und Kult）」の訳者である稲垣は解説の中で、ドイツ語の *Muße* を余暇と訳したが訳語については工夫の余地があると述べている（ビーパー，1988，p. 114）．ビーパーのいう「余暇」とは、労働から引かれた余った時間なのではなく、「精神的態度を指す言葉」であり、「人間の在り方、精神の状態」（ビーパー，1988，p. 66）なのであり、「スポーツ運動」の体験や美的体験と関連があるものと考えられる．

注7) この中井の「時間的タイム」という表記は、樋口が指摘するように「時計的タイム」の誤植である（樋口，1987，p. 169）．中井は他でも、前出した「時計的時間構造（中井，1981b，p. 34）」、あるいは「時計的俗衆的時間（中井，1981b，p. 31）」など、「時計的」という表記を用いている．

注8) しかしながら本研究における「意味生成の体験」は、この美的気分の体験とは異なる可能性がある．何故ならば、美的気分の体験が「長い練習の持続によって支えられた（樋口，1987，p. 167）」、「練習に練習を重ねることで、鍛錬に鍛錬をつみ重ねることでのみ（中井，1975）」達成する高度な技術性に基づくものだからである．

中井は「筋肉操作」の美感にはふたつの段階があることを指摘している．先に述べたように、主観でもあり客観でもある筋肉、樋口の言葉では「主観－身体」と「客観－身体」の間に生じる「運動感覚的な体験（樋口，1994，p. 191）」において「外的自然の中に、整った身体機能、すなわち、内的自然の完き活動を可能ならしむる意味で、それ自体として快適（中井，1981a，p. 417）」である美的気分を生じさせるのであるが、中井はそれを「静力学的な快」であるとしている．そして「それが一度その疲労を通して立上り始むるとき、真のスポーツの筋肉操作上の快感がそのもう一つ奥の扉を開く時である．それはむしろ動力的ともいわれるべきであろう（中井，1981a，p. 417）」と述べている．この「動力的な快」へと到達するには

「練習」と「忍苦」が必要なのである。

中井や樋口が指摘するように、長く苦しい練習によって身につけた高度な技術による「スポーツ運動」の実践が特別な体験を生み出すことは確かである。しかしながら、本研究における「意味生成の体験」は低い技術のレベルにおいても起こりうると考える。そうでなければ、初心者が嬉々としてその「スポーツ運動」を実践する事態を説明できないからである。また高度な技術に到達すべく行われている「スポーツ運動」の日々の練習の最中にも「意味生成の体験」は生起しているのであり、それが次の練習へと駆り立てるのである。これらの「体験」は「美的気分の体験」と呼べるものではない。中井のいう「静力学的快」、あるいはそれ以前のものかもしれない。

「スポーツ運動」の体験には「エロスの体験」と「タナトスの体験」があり、前者はその「スポーツ運動」の目標達成の体験であり、後者は「スポーツ運動」が失敗し、日常的な身体的秩序が崩壊する目眩の体験であるという（久保，2009b, pp. 189-192）。この「スポーツ運動」の失敗とは、中井の言葉を借りれば、「自然の技巧」と「内なる自然（人間的身体機能構成）」との不整合の体験である。もちろん「美的体験」ではないが、それも「自然の技巧」を「主観一身体」が感じる意味ある体験であると考えられる。これらの「スポーツ運動」体験における技術性的問題は今後の課題となる。

文 献

- 阿江通良（2008）一流選手の良い動きに関するバイオメカニクスの研究。化学工学，72(5): 8-11.
- バシュアール，G.: 掛下栄一郎訳（1969）瞬間と持続。紀伊国屋書店：東京。
- ベルクソン，H.: 中村文郎訳（2001）時間と自由。岩波書店：東京。
- アイヒベルグ，H.: 清水論訳（1997）身体文化のイメージネーション。新評論：東京。
- Fraleigh, W.P. (1984) Right actions in sport. *Human Kinetics: Champaign*, p. 96. <近藤良享他訳：スポーツモラル。不昧堂出版：東京，（1989）pp. 119-120.>
- 深澤浩洋・石垣健二（2010）スポーツにおける意味生成論—拡大体験の可能性とその契機—。体育学研究，55(1): 97-110.
- 樋口 聡（1987）スポーツの美学。不昧堂出版：東京。
- 樋口 聡（1994）遊戯する身体。大学教育出版：岡山。
- ジャクソン，S.A.・チクセントミハイ，M.: 今村浩明ほか訳（2005）スポーツを楽しむ。世界思想社：京都。
- 掛下栄一郎（1969）美と瞬間—瞬間の美学への一試論—。美学，79: 1-9.
- 掛下栄一郎（1971）美的時間—持続から瞬間へ—。早稲田人文自然科学研究，7: 107-121.
<http://hdl.handle.net/2065/10125>（参照日2011年7月21日）
- 掛下栄一郎（1975）瞬間の美学への試論（Ⅱ）：プラトンを中心に。早稲田人文自然科学研究，12: 42-43.
<http://hdl.handle.net/2065/10135>（参照日2011年6月7日）
- カント，I.: 篠田英雄訳（1964）判断力批判。岩波書店：東京，pp. 62-67.
- カント，I.: 天野貞祐訳（1979）純粹理性批判（Ⅰ）。講談社：東京，p. 160.
- 久保正秋（2006）「体育における人間形成」論の批判的検討 5—人間の「形成」と「生成」。体育哲学研究，36: 1-7.
- 久保正秋（2009a）「体育における人間形成」論の批判的検討 6—身体の意味ある「体験」。体育哲学研究，39: 1-9.
- 久保正秋（2009b）意味生成としての「スポーツ運動」体験の意義。体育学研究，54(1): 183-196.
- Lenk, H. (1979) *Social philosophy of athletics*. Stipes Publishing Company: Champaign, p. 50.
- マズロー，A.H.: 小口忠彦訳（1987）人間性の心理学。産能大学出版部：東京，pp. 246-248.
- 中井正一（1962）スポーツ気分の構造。久野収編 美と集団の論理。中央公論社：東京，pp. 172-185.
- 中井正一（1975）美学入門。朝日新聞社：東京，p. 21.
- 中井正一（1981a）スポーツの美的要素。久野修編 中井正一全集 1。美術出版社：東京，pp. 407-421.
- 中井正一（1981b）リズムの構造。久野修編 中井正一全集 2。美術出版社：東京，pp. 29-42.
- ピーパー，J.: 稲垣良典訳（1988）余暇と祝祭。講談社：東京。
- 佐藤臣彦（1998）スポーツと思想。身体運動文化学会編 身体教育のアスペクト。道と書院：東京，pp. 4-5.
- 佐藤 透（1999）時間体験の哲学。行路社：京都。
- 高橋 徹（2011）「経験としてのスポーツ」に関する研究：デューイ経験概念の再評価から。体育学研究，56(2): 297-311.
- 矢野智司（1999）非知の体験としての身体運動。体育原理研究，29: 108-112.
- 矢野智司（2002）関係の変容と関係概念の貧困化—教

育における関係性の危機とは何か―. 教育学研究,
69(1): 49-51.

(平成24年11月22日受付)
(平成25年3月19日受理)

Advance Publication by J-STAGE

Published online 2013/4/12